

私を呼んだ風景

杉本 典子 (福岡市東区)



列車を降り駅を出て、坂道を下りてくと登る。丘を切り拓いた住宅地に、家族が住む家がある。アスファルトの乾いた熱気のある道を通り過ぎて山道の階段を上る頃には、じつとりと服が汗ばんできて、「やっぱり家まで遠いなあ」とつぶやいてみる。坂の上の公園まで上がってくれば、家まですぐだ。あと少し、あと少し。食い込むバッグの肩ひもを、「よし。」と持ち替えながら角を曲がる。

すると突然、下り道のはるか先に広がる真つ青な空、少しぼうつと霞みながらキラキラ光に反射する海が、ワンセットで目に飛び込んできた。まるで、坂を上ってきた私をねぎらうような、こ褒美のような景色。夜に帰省する事が多かったせいか、慣れ親しんだはずの風景を忘れており、その美しさに何年も気づかなかった事に軽いショックを受けた。以前友人が何の気なしに口にした言葉が、頭の中で響いた。

「家に帰ればいいじゃん」



文中に描かれている風景は本当に福岡市の端っこにあるのでしょうか。いや敢えて詮索しないでおきましょう。その方がこの平凡な文章に皆がシンクロするのです。そして風景は目に写る画像ではなく、心に映す絵なのだということに気付くでしょう。映す絵が多いほど人は幸せになるのです。杉本さんの幸せを祈る。

(選考委員 岡本 均)

その言葉がバチン、と風景とシンクロした。私が実家に帰ることを決めた瞬間だった。出て七年、もう帰ってこないだろうと思っていた家。

夜が白む頃、奇怪な声で鳴く正体不明の鳥、台風が来れば窓外で聞こえる風の唸り。滴り落ちそうな赤橙色のおつきな夕日。草刈りの音で目覚める朝もある。福岡市の端っこには、自然をこんなにも感じられる場所があった。

正直に言えば私はまだ、街中より空気の濃いついここに慣れてはいない。一人暮らしの便利さを懐かしむことも多いし、家族との間近な関係に時折むせそうになる。三十路、未婚の娘が帰ってきて最初は氣遣っていたような両親が、ひと月も経てば「結婚しないの？」と心中を探るときもある。

煩わしさを感じるだろうと予測していた。それでも私は今、変わらないことを誇らしげに思っているようなこの町に、身を置いておきたいのだ。

第8回福岡市景観エッセー

福岡都市高速一号上り線

タケウマ (長崎県佐世保市)



俺：三十五才：職業はタクシードライバー
：キャリアは三年になる：市内の地名なら聞いただけで最短コースが頭に浮かぶ：信号の変わるタイミング：時間帯で変わる一方通行：体が記憶している：大きな苦情はないが誉められることも無い：朝から深夜までの勤務：ツルむのが苦手で勤務時間のほとんどを単独で幹線道路を流して過ごす：信じられるのは自分自身の勘だけ：寂しくないと言えば嘘になるが今のところ不満はない。

こんな俺には上司や同僚に知られていない秘密がある：別に秘密にする程大した事では無いのだが積極的に打ち明ける気にはなれない：大袈裟に言えば：俺だけの取って置きの眺め：そんなところだ。

午前二時を回ると潮が引いたかの様に客足が途絶える：繁華街を横切る通りは空車のタクシードで溢れ返る：街が眠りにつく：俺にはそんな瞬間に思える：最後の客を求める同業車たちを尻目に俺はハンドルを西に向ける：



800字のモノローグドラマ、短いフレーズで一気に読ませる構成は見事である。見慣れたはずの風景が、時空を飛翔する物語によって、共感を誘う魅力的な舞台になる。速度の緩急が映画のカメラワークを連想させる。

(選考委員 永崎 明子)

そう：街が眠る時：俺の秘密がはじまる：人気が無い百道地区を抜けて都市高速百道料金所に飛び込む：方向はもちろん上り線：手持無沙汰な料金の係員に回数券を渡しお互いの労をねぎらうと一気に制限速度まで加速する：さすがに交通量は少ない：時折現れる後続車はあざけ笑う様に追い越して行く：お気を付けて：西公園入口手前の右カーブでアクセルを少し緩めてみる：荒津大橋の頂上部分で更に減速：ここから俺の秘密の核心だ：右・左と続く緩いS字コーナー：天神北出口が右へ分岐するあたり：陳腐な言葉だが：宝箱を引っくり返した様な：短い眠りについた街の明かりがフロントガラス一面に広がる：今日も一日コマネズミの様に走り回ったこの街を征服した様な：そんな刹那のために俺は明日も働くのだろう：さて：車庫に戻って：一日の汚れを落とすでしょう：この街が短い眠りから覚める：その前に。